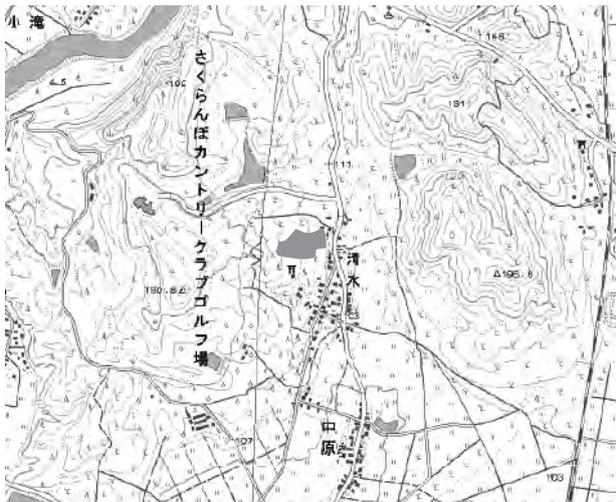


はぐるじんじやし 羽黒神社西遺跡（第2次）

遺跡番号	208-159
調査次数	第2次
所在地	山形県村山市名取
北緯・東経	38度31分01秒・140度22分25秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起回事業	東北中央道（東根～尾花沢間）
調査面積	3,400 m ²
受託期間	平成27年4月1日～平成28年3月31日
現地調査	平成27年5月25日～11月27日
調査担当者	大場正善（現場責任者）・渡辺和行・菊池玄輝
調査協力	村山市教育委員会
遺跡種別	集落跡
時代	縄文（早期・前期・中期・晩期）・古墳？・平安
遺構	掘立柱建物跡・盛土状遺構・フラスコ状土坑・土坑・石囲い炉・土器敷き石囲い炉・土坑墓
遺物	縄文土器・石器・土偶・石棒・土師器・須恵器・赤焼き土器・砥石（文化財認定箱数：198箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

遺跡の位置 羽黒神社西遺跡は、村山市名取^{しず}清水に所在する。遺跡は、最上川の三難所の一つ「^{はやぶさ}隼の瀬」の南から約1.8km離れた、河島山丘陵の東側に舌状に張り出した丘陵地に立地する（写真1）。遺跡周辺は、「清水」という字名が示すように、近隣に湧水する場所がいくつか認められる。北西に約4km離れた同市^{とみなみ}富並には、縄文時代中期の環状集落跡として著名な^{かんじょう}西海淵遺跡があり、そのほか市内湯野沢の中村A遺跡、^{ゆのざわ}土生田の落合遺跡など、遺跡の近くには縄文時代中期の遺跡が多く存

在している。

調査の経過 遺跡は、平成25年度の県教委による分布調査で存在が明らかとなり、翌年に当センターが第1次発掘調査を行った。第1次調査では、縄文時代中期を中心とする大量の土器や打製・磨製石器、土偶、袋状土製品などとともに、フラスコ状土坑^{もりど}や盛土状遺構などの遺構が発見された。第2次調査は、第1次調査からの引き続きである3・4区の遺構精査、および新たに設定した南側の5区と北側の6区の掘り下げと遺構精査を行った。

遺構と遺物

フラスコ状土坑 3・4区では、合計13基の大小のフラスコ状土坑が確認された。第1次調査時発見のフラスコ状土坑とあわせると計17基になる。フラスコ状土坑は、深さが約2.5mで底部の幅が約2mのものから、深さが約1mで底部の幅が約1mのものまでである。これらの土坑の大半は、下から3/4程度まで意図的に埋められ、それよりは自然堆積であった。埋土はクロボク土や地山の土を主体に、大量の木炭と、土器片や石器資料が混在していた（写真5）。なかには炭化物の単層があり、炭化物層の直下が赤色化しているものも確認された。一部のフラスコ状



写真1 調査区全景（南西から）



写真2 SK393 大型フラスコ状土坑断面（北東から）



写真3 4区SF513 盛土状遺構南北断面(1次調査:南西から)

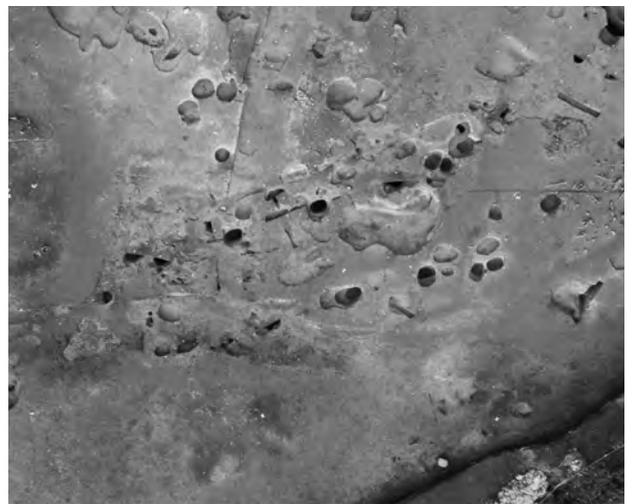


写真4 SB561 掘立柱建物跡（俯瞰：上が北）

土坑では、底面やその付近で完形の深鉢形・浅鉢形土器が倒立、あるいは横転の状態で出土した。また3区の東側のSK326の底面では、多数の線条痕せんじょうこんが確認され、線条痕の規則性からすだれ状の圧痕である可能性が想定された。

盛土状遺構 盛土状遺構は、第1次調査で3区と4区にそれぞれ1カ所ずつ確認していた（SF488・513）。第2次調査において、盛土状遺構の精査を行ったところ、盛土層は、クロボク土、あるいはクロボク土を起源とする土壌の上に、厚さ20cm程度の地山の土壌を主体としている。盛土層自体には遺物をあまり含んでいないが、その上下からは、縄文時代中期の遺物が多量に出土した。

焼土遺構 焼土遺構しょうどの認定については、赤色に変化し、炭化物が混じる範囲とした。焼土遺構は、3区・4区のとくに境界付近や、盛土状遺構の周辺に多く認められた。また、後述する3区ほったてぼしらたてものあとの掘立柱建物跡の付近や、6区の中央

付近でも認められた。

フラスコ状土坑の構築・埋め立て 翻って、土坑の埋土や盛土状遺構、遺物の分布状況、焼土遺構をあわせて考えると、フラスコ状土坑は地山を1～2.5m掘る必要がある。その際には、多量の土、つまり廃土はいどが排出されることになる。盛土状遺構の盛土層は、地山の土を主体としており、そのことから、盛土遺構がフラスコ状土坑の掘削時の廃土置き場であった可能性がある。盛土状遺構の上下やその周囲には、縄文中期の遺物を中心とする遺物が拡がっており、また焼土遺構も盛土状遺構の周りに点在する。土坑の埋土中の遺物や炭化物が、盛土状遺構の上下や周りに分布する遺物分布や焼土遺構に由来するならば、フラスコ状土坑は、遺物や炭化物が混じった廃土を利用して埋め立てられた可能性が考えられる。このことは、今後の整理作業でフラスコ状土坑と、フラスコ状土坑外出土の遺物との接合作業を通じて、検証していきたい。なお、打製

石斧や、土掘りの際に残された特徴的な使用痕を残す石器が発見されておらず、土坑の掘削には、木製品を用いていた可能性が考えられる。

掘立柱建物跡 第2次調査では、3区の5区境界付近で、1間×4間で約4×11mのSB561掘立柱建物跡が1基確認された。建物跡内にはSL0230石囲い炉や焼土遺構があり、また周辺からは縄文時代中期の土器や石器などの遺物も多く出土した。第1次調査では、ヒトが住んでいた場所が不明であったが、当該遺構は、中期の居住空間であった可能性がある。また、4区のフラスコ状土坑に隣接するSX227は、約3.5m×2.8mで、楕円形を呈する小型の^{たてあなじゆうきよ}竪穴住居の可能性が有る。そのSK227の中心には、小型のフラスコ状土坑があり、フラスコ状土坑を埋めたのちに、竪穴住居が構築されたことになる。

6区の石囲炉跡と柱穴 調査区北側の6区では、数個の川原石を径50cm程度に丸く囲ったSL232石囲炉が1基確認された。周囲には、縄文中期の土器がややまとまって出土したものの、柱穴などの遺構が確認されず、屋外に設けられた炉であった可能性がある。しかし、石組の石には被熱痕跡が認められるが、炉の中心部では、焼土や炭化物が確認されなかった。6区では、このほかに北西の調査区壁沿いで、径30cm、50～60cm程度の深さの柱穴と思われる遺構が確認された。

中期の遺物 第2次調査では、全体でコンテナ約200箱の遺物が出土した。遺物の大半は、縄文中期に属する。大小の深鉢形や浅鉢形の土器、土偶、袋状・管状土製品、^{しゆさい}朱彩（^{うるしぬ}漆塗り?）された^{ゆうこうつば}有孔鏝付き土器、^{せきぞく}石鏃、^{いしさじ}石匙、直刃スクレイパー、エンドスクレイパー、ヘラ形石器、^{いけいせつき}異形石器、^{ませいせきふ}剥片・石核、^{すりいし}磨製石斧、磨石、ハンマーストーン、^{しきやくつきいしざら}石皿、^{ゆうこうせきせいひん}支脚付石皿、^{きつこん}有孔石製品、^{だいぎ}擦痕のある水晶などである。土器は、^{だいぎ}大木8b式のもの^{せきぞく}が大半を占めることから、縄文中期のごく短期間に遺跡が形成されたものと考えられる。石器については、トウールの比率が多く、総じて刃部などの磨滅や破損が認められる。

早期・前期・晩期の遺物 第2次調査では、第1次調査と同様に、縄文早期前葉の^{おしがた}押型文、^{ちんせん}沈線文、^{じょうこん}条痕文土器が出土した。今回は、これらに加えて、早期後葉の^{かいがらふくえん}貝殻腹縁文土器片が出土した。また、わずかながら、大木1式に相当する^{うじょう}繊維を含んだ^{うじょう}羽状縄文土器や、6区の東側で縄文晩期に相当する土器片も出土した。

古墳時代の土師器 また、今回の調査では、3区において古墳時代中期に帰属すると考えられる土師器の丸底の碗と思われる土器片が1点発見された。本遺跡から北東に1.3km離れた^{ひがしくまのなえぼたけ}村山市東熊野苗畑遺跡では、センターの調査によって河川跡から古墳時代前期と考えられる甕が出土し、また河島山丘陵には、名取古墳や河島山古墳群、集落跡である^{はつたん}八反遺跡がある。そのため、近隣には古墳時代の集落などの遺跡が存在する可能性が考えられる。

平安時代の土坑墓 6区の南側では、埋土中に平安時代の^{あかやき}赤焼土器の^{せきぞく}坏が1点出土した、楕円形のSK237土坑が1基確認された（写真6）。土器の出土状況は、土坑の東側に偏った位置に、内面を天に向けて据えられたような状態であった。その出土状況と土坑の規模から、^{ぼこう}墓壙、つまり^{どこうぼ}土坑墓であった可能性が考えられる。また、土器の外面上には、三十を表す「卅」と、「コ」のような文字が^{ぼくしよ}墨書されていた。おそらく何らかの数量を意味すると思われる。なお、「卅」が墨書された土器は、遺跡の南側に位置する^{しず}清水遺跡1でも確認されている。

まとめ

羽黒神社西遺跡の2度にわたる発掘調査によって、当該地点に縄文時代（早・前・中・晩）、古墳時代、平安時代にわたるヒトびとの活動痕跡が残されていることが明らかとなった。とくに、縄文時代中期・大木8b式段階の遺構・遺物が濃密に残されており、フラスコ状土坑の構築・埋め立ての過程が判明した事例は、全国的にも例を見ない。また、縄文中期の資料は、当時の生活像を考察するうえで、本遺跡は好適であり、今後の整理作業において追究していくこととなる。なお、第1次調査で採取された炭化したクリの子葉の炭素14年代測定では、4375±20yrBP、^{れきねんこうせい}暦年較正で4962～4879calBP、つまり約4900年前の年代値が得られている。

また、縄文時代早期の土器片についても、県内で数が少なく、とくに押型土器は、県内でも比較的にまとまった事例となる。

第2次調査では、平安時代と考えられる土坑墓が確認された。本遺跡の500m圏内に位置する清水遺跡1・2・3では、同時期の集落跡がセンターの発掘調査で確認されており、平安時代に河島山丘陵において集落域と墓域とに別れて展開していた可能性がうかがわれる。